

ボランティア活動に興味がある人のための体験型セミナー
～「体験する！楽しむ！考える！繋がる！」2日間～

- 1 趣 旨 青少年教育施設におけるボランティア活動について理解を深めるとともに、必要な知識・技術を学ぶ場を提供することを通して、今後のボランティア活動についての意欲を高め、青少年教育施設で活動できるボランティアを育成する。
- 2 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立淡路青少年交流の家
- 3 後 援 兵庫県教育委員会・徳島県教育委員会・神戸市教育委員会
- 4 日 程 令和6年6月8日（土）～6月9日（日）1泊2日
- 5 場 所 国立淡路青少年交流の家（兵庫県南あわじ市阿万塩屋町757-39）
- 6 参加人数 43名
内訳：男性14名、女性29名（大学生17名・社会人2名・高校生24名）
- 7 対 象 者 大学生・高校生など、青少年教育施設におけるボランティア活動に参加したい、もしくは興味がある人（※中学生以下は参加不可）

8 プログラム内容

6月8日（土）

【青少年教育施設ってどんなところ？】10：30～12：00

班での簡単な自己紹介とアイスブレイクの後、講義をスタートさせた。

はじめに、参加者が現時点で抱えている「国立淡路青少年交流の家のイメージ」をA4用紙に書いてもらい班全員で共有した。「自然」、「交流」、「宿泊」、「野外活動」というキーワードが多く見られ、これから始まるセミナーへの期待感を高めた。その後、「キャンプネーム（セミナー中に名乗るニックネーム）」を考え、セミナーの間はキャンプネームで呼び合うことを確認した。それぞれが個性溢れるキャンプネームを考え、明るい雰囲気ですeminarがスタートできた。

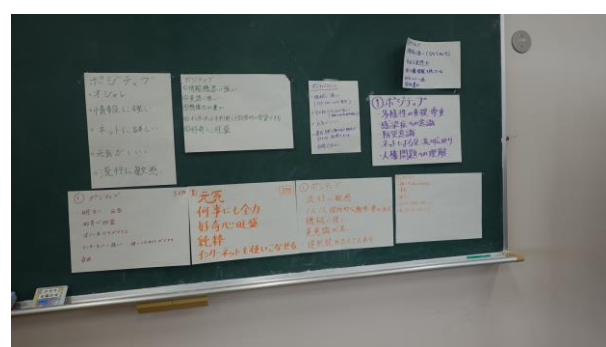
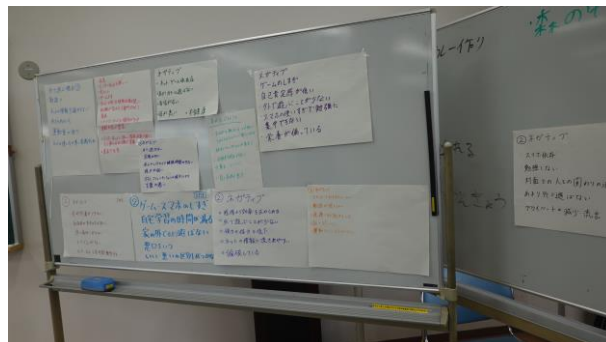
講義が終わった後は、「全力で楽しむ」「失敗も笑い飛ばす」という当セミナーのルールの下、10人前後で5班に分かれグループで協力しながらゲームに取り組んだ。このゲームの順位で夕食の食材が決まるという設定から、意見を出し合いながら試行錯誤を繰り返す姿がみられ、初対面の参加者ともコミュニケーションを取りながら参加する様子が印象的だった。施設職員主体のゲームを1つ、ボランティア主体のゲームを2つ行った。初対面とは思えないほど打ち解けることができ、午前の活動が終了した。





【青少年教育について】 12：30～14：00

白形主任企画指導専門職より「青少年教育について」という講義を受講した。初めに、生涯学習、社会教育について学び、参加者が感じる今の子供たちの実態について考え、共有した。次に、ポジティブな部分とネガティブな部分に分けて発表した。参加者から多くの意見が出て、実体験が不足しているということも学んだ。また、そういった実体験活動の場を提供しているのが、交流の家だということも学んだ。改めて「青少年教育」について考える機会を持つことで、青少年教育施設でのボランティア活動を見直す機会となった。



【アウトドアクッキング】 14：30～18：15

ボランティア活動の技術という実習で「アウトドアクッキング」を行った。主食や具材はくじ引きで決め、何をどのように作るかをまずはグループごとに話し合っていた。話し合いが終わった後は、それぞれグループ内で役割を決め、分担して活動していた。火を起こす方法は、メタルマッチを使用した。麻布や新聞紙に着火するのは中々難しく、周りに落ちている乾燥した草木を利用して火起こしをしていた。苦勞して調理したからか、どのグループも「美味しい」といってたくさん食べている様子が印象的であった。参加者アンケートには「アウトドアクッキングが楽しかった」といったような感想が多く見られたことから、参加者にとって有意義な時間になったことが伺える。



【ボランティア活動の意義】19:00~20:30

講義の初めに「ボランティア活動の意義ってなんだと思う?」「これってボランティア?」と質問を投げかけ、ボランティアについて参加者全員で考える時間を設けた。ペアを作り、紙に書いた自分の考えを発表する機会を多く設けたことで、参加者同士の仲がさらに深まっていくのを感じた。参加者が質問を考えたり、全体で共有したりすることで、有意義な時間となった。また4つの原則「自発性」「無償性」「社会性」「先駆性」について学び、考えることができた。



6月9日(日)

【赤十字救急法】 9:00~12:00

セミナー2日目は、日本赤十字社兵庫県支部から講師をお招きし、傷病者手当の基本や胸骨圧迫、AEDを用いた除細動などの一次救命処置を中心とした「赤十字救急法」について学んだ。

はじめに、傷病者を発見した際の観察の仕方を学んだ。自分の安全を確保したうえで対応にあたることや、傷病者の意識の有無で対応が異なるため、冷静に状況を判断し、その状況に応じた対応が必要であることを理解した。その後ペアになり演習を行った。

続いて、心肺蘇生、AEDを用いた電気ショック、気道異物除去等の一時救命処置の基礎を実技中心で学んだ。実際に一時救命処置の技術が役に立った事例が紹介されたこともあり、全参加者が熱心に取り組んだ。グループに分かれ、一人ずつ役割を交代しながら演習を行った。

3時間の講義・演習を通して、青少年教育施設ボランティアとして必要な「安全管理」の技術を身に付けることができた。



【淡路でできるボランティア活動について】 13:00~15:00

はじめに交流の家職員と先輩ボランティア4名によるパネルディスカッション形式で、国立淡路青少年交流の家で参加できるボランティア活動についての紹介を行った。(昨年度の取り組み事例の説明)

続いて、先輩ボランティアから「なぜ、ボランティアを始めたのか」、「ボランティアを通して、どのような学びがあったのか」、「私の失敗体験」などについても語ってもらった。生き生きと語る同年代の言葉のおかげで、参加者の聞く姿勢にも力が入っており、交流の家の教育事業の魅力や、ボランティア活動の魅力を感じてくれたようだった。

また、先輩ボランティアにおいても、自分たちの思いを言語化したことで、ボランティア活動の魅力を再認識するとともに、改めて「なぜ、ボランティア活動に参加するのか」という気持ちの整理ができたようだった。ボランティアに参加してみたい、交流の家の事業に参加してみたいという方が多かった。



9 参加者の声（アンケートより抜粋）

- ・他の事業にも参加したいと思った。
- ・たくさんの人と関わることができた。
- ・今まで経験した土日で一番内容の濃い土日だった。
- ・自分のアイデアを積極的に出せるようになった。
- ・コミュニケーションを取るのが苦手だったが、話をするようになった。
- ・失敗もしたがそれを上回る体験ができた。
- ・コミュニケーションをとる大切さを感じた。
- ・人と関わることの楽しさを知った。
- ・野外活動をもう少ししたかった。
- ・自分から行動することの大切さを知った。

10 所感

今回のセミナーの参加者は、必ずしもボランティア活動に高い関心と意欲を持っているわけではなく「なんとなく面白そうだったから」「単位取得のため」という動機の参加者もいた。しかし、事後のアンケートでは「参加してよかった」「ボランティアへの参加意欲が高まった」「自分自身が成長できた」などの感想をいただき、概ね事業の目的は達成できたように思う。今年度の事業案内を行うと、早速予定を確認する姿が見られ、興味を持っている参加者が多かった。交流の家でのボランティア活動に参加したいという声も多く、今後の活動に期待が持てる。

また、交流の家での教育事業等のボランティア活動に限らず、被災地支援や地域の清掃など「ボランティア」や「社会活動」そのものに関心を持った参加者が多く、地域社会等で活躍できるボランティアの育成につなげることができた。